

論文

プロト儀礼の体系

—インド・ベンガル地方の家庭祭祀を捉える視点—

外川昌彦

はじめに

- 1 問題の所在
- 2 学説史的背景
- 3 プロト儀礼の分類
 - (1) オボニンドロナトの視点
 - (2) 分類の体系
- 4 調査地の概況
- 5 プロト儀礼の普及本について
- 6 プロト儀礼の通年構成
 - (1) 普及本と調査地の事例
 - (2) 寡婦のプロト（ビドワ・プロト）
- 7 プロト儀礼の体系
 - (1) プロト儀礼の内容別分類
 - (2) プロト儀礼の分類体系

まとめ

はじめに

プロト儀礼は、インド・ベンガル地方の農村部に伝承される、女性が実践する一群の家庭祭祀の体系である¹。このプロト儀礼は、一般にバラモン司祭の権威が優越するヒンドゥー教儀礼において家庭の女性や少女が主導する儀礼的行為として、あるいはサンスクリット語で書かれた古典籍に規定されるヒンドゥー神話に対して村落地方で長く伝承されて来た口頭伝承に基づく儀礼体系として、さらに「アルポナ」と呼ばれる女性の描く民俗芸術のジャンルとして、これまで多くの人々の興味を集めて来た²。筆者は、多様な方向から注目されてきたプロト儀礼について、特に通過儀礼に関わる儀礼としてのプロト儀礼、母子の安寧に関わるショスティ女神の儀礼、災厄を取り除く意味を持つ既婚女性の儀礼などに注目することで、その特徴を明らかにした³。これらの一連の研究を通して明らかになるのは、儀礼の文化史的な観点や機能主義的研究とは異なる、プロト儀礼が実践されているベンガル農村社会における、その体系的記述の必要性であった。このような地域社会に位置づけられたプロト儀礼の総体的な検討によって、初めて今日の農村社会における階層やカースト、ジェンダーなどの観点から儀礼の意味を捉えなおすことが出来ると言えるだろう。本稿では、このような「プロト儀礼」と総称される多様な儀礼の特質を整理し、その儀礼体系の構築を跡付けるために不可欠な視点を検討する。特に、一般に流布されているベンガル語の普及本（後述）と、調査地で観察されるプロト儀礼の実践体系との比較検討を行うことで、プロト儀礼が総体として提示する儀礼の意味を明らかにする。

以下では、プロト儀礼に関するこれまでの先行研究を概観することで、このような本稿の観点を整理して述べたい。

1 問題の所在

プロト儀礼は、南アジアのヒンドゥー社会において、一般にある種の牧歌的なイメージとともに理解されてきた。例えば、インドを代表する映画監督サタジット・レイの代表的作『大地のうた』では、「ブンニブクル・プロト（聖なる池の儀礼）」と呼ばれる少女の儀礼を行うシーンが、効果的に織り込まれている⁴。ベンガルの農村部で実際にこの儀礼を行っている村人は、この儀礼

を行う理由を、少女が将来に良き夫を得て幸せな生涯を送るために必要な儀礼と説明する。とりわけ理想的な夫としてのシヴァ神に喩えられる良き夫に巡り合うための祈願であると理解されている。実際、少女の儀礼（クマリ・プロト）に見られるマントラ（呪言）の内容を見ると、少女が成長した将来における、「貞淑な妻」といったヒンドゥー女性の理想的な姿が描き出されている。具体的には、ブンニプクル・プロト儀礼に出てくるマントラには、儀礼を行う少女が、「7人の兄弟を持つ妹」を理想とする表現が見られる。この7人の兄弟に囲まれた妹は、ヒンドゥー社会では最も幸せな娘を象徴するのである⁵。このことは、良く知られたプロト儀礼のひとつであるショスティ女神の儀礼が、結婚した女性による子宝や安産の祈願、あるいは子供の無事な成長への祈願とされることに対応する。ショスティ女神は、子供に関わる女神であり、子供の安寧を司るものと見なされているのである⁶。このように、プロト儀礼が女性の幸せな生涯のための祈願であるという理解は、この儀礼を実践する村人の間で広く共有された見解となっている。同時にこのような見解に基づくことで、この儀礼を評価してきた多くの研究者は、古い時代に遡ることのできる、「ベンガルの基層文化」を今に伝える伝承として、その牧歌的な農村女性のイメージとともに描いてきたのである⁷。

ところで、このようないわば民俗学者による文化史的な見地に対して、農村部でのフィールド・ワークを行った人類学者の間では、このプロト儀礼を「誓願儀礼」として解釈する傾向が見られた。例えば Maity[1988]は、フレイザーの「類感呪術」と「感染呪術」の定義に基づき、プロト儀礼を、儀礼的行為を通して外界に働きかける「呪術行為」と捉えることで、儀礼ごとの祈願内容の類推を試みた。ここでは、個々のプロト儀礼を、それぞれの儀礼的所作やマントラに隠喩的に結びつけられる祈願内容を想定することで、儀礼ごとの類別化が試みられたのである。プロト儀礼には地域や担い手によって非常にたくさんの種類が見られるので、それぞれの地方で、また様々な年齢層の女性が従事する多様な誓願儀礼の体系として理解された。このような見解は、個々の儀礼の祈願内容がその目的にしたがって類別される呪術的行為の体系として把握されたという意味で、プロト儀礼の目的論的な解釈として整理することが出来る。このように、プロト儀礼を請願儀礼として解釈し、

様々な隠喩的意味を指摘しようとする見解は数多い⁸。

ところで、このプロト儀礼の様々なヴァリエーションを検討し、それらを相互につき合わせて見て行くと、必ずしも個々のプロト儀礼における「儀礼的所作」と「祈願内容」とが、記号的に一対一に対応しているとは言えないものも多く含まれていることが分かる。例えば、豊饒性の女神として、ヒンドゥー世界ではもっともポピュラーな女神であるラクシュミー女神に対して、ベンガルの女性たちは、年に4回に渡りプロト儀礼を行っている。これは、山盛りにされた稲穂をラクシュミー女神そのもと見なして、断食などの様々な儀礼的行為を実践するものである。しかし、何故このラクシュミー・プロトは年に4回も行われる必要があるのだろうか。また、一年を通じて最もプロト儀礼が数多く行われる猛暑の夏のボイシャク月は、村の少女たちがブンニプクル・プロト儀礼を行う時期として知られている⁹。ところでこの儀礼は、調査地ではひとたびボイシャク月に始めたら、秋のオッガン月にはサート・プジュニ・プロトを行うことが決められている。すると、ボイシャク月とオッガン月の儀礼は、一定の年齢に達した少女にとってひと組の儀礼体系として把握しなければ、その意味が十分には理解出来ないことになる。さらに、夫を失ったヒンドゥー寡婦は、多様で嚴重な禁忌に囲まれた生活を行うことが求められる。特に、色柄もののサリーが忌避され、一切の肉食を控えて菜食を守り、月に何日も課される断食日を守ることで、ひたすら死後の夫の果報を祈り宗教的な生活に入ることが理想とされる。その際に、日々の寡婦の暮らしの中で繰り返し実践されるのが、このプロト儀礼である。単純な「祈願」であるなら、何故これほど繰り返し、厳しいプロトの断食行為が繰り返えられる必要があるのだろうか。確かに、個々のプロト儀礼には、「雨乞い」や「安産」、「豊かな稔り」や「家族や夫の安寧」といった、特定の祈願内容を想定することが可能である。しかし、このような外部から解釈が与えられる儀礼の体系が、それを行っている当事者にとっての儀礼の意味と、必ずしも一致しているとは限らないのは何故なのだろうか。

このように、プロト儀礼を、単に文化史的な観点や個々の儀礼の合目的な属性のみを強調してゆく見解は、それに参与する様々な階層やジェンダー、カーストに基づく多様な儀礼の実践体系という観点を見えにくくしてしまう。

例えば、村に滞在することがしばしば困難になる猛暑のボイシャク月から雨期にかけて、少女を中心に複雑なプロト儀礼の実践が求められているのは何故なのか。また、複雑に構成される反復的で継続的な儀礼実践が、既婚女性を中心に年間を通して求められているのは何故なのだろうか。このような問題意識に立つと、「ベンガルの基層文化」という文化史的観点や、研究者の合目的な儀礼分類に基づく儀礼解釈という既存のプロト儀礼論では十分ではなく、むしろプロト儀礼を実践する人々が認識する儀礼体系を、総体として評価する視点が必要となるだろう。同時にこのような視点は、今後の他地域の多様な儀礼資料との突き合わせという、より広範な比較研究を可能とする資料を提示することにもなるのである。以上のような観点に立ち、本稿では、インド西ベンガル州ボルドマン県における調査村の事例に基づいた、プロト儀礼の実践体系を検証する。

本書の構成は次の通りである。初めにプロト儀礼に関わる学説史的な展開を概観し、次にプロト儀礼の分類体系に関わる一連の研究を検討する。さらに、調査地の概況について述べた後、ベンガル語による在地資料の検証と、村落で観察されたプロト儀礼の実践体系の検証を通して、当事者によって認識されるプロト儀礼の実践体系を明らかにする。

2 学説史的背景

歴史的なもっとも初期のプロト儀礼の観察記録は、11世紀のイスラム教徒の旅行者アル・ビルニ(973-1030)の記述とされる[Pearson 1996:223]。その後、このプロト儀礼に関する記録は、南アジアの「土着宗教」であるヒンドゥー教を理解する試みの一貫として、多くのヨーロッパ人の興味を集めてきた。18・19世紀には、東インド会社などのヨーロッパ人による交易活動の進展に伴い、キリスト教の宣教師たちによる、現地社会の観察や記述が精力的に進められた。その中では、マドラス管区の宣教師であったデュボアの記述がよく知られている¹⁰。

特にベンガル地方では、「プロト・コタ (プロト物語)」と呼ばれる一連の物語が採集され、20世紀に入ってから出版物として流通するようになった。「メエデル・プロト・コタ (女性たちのプロト物語)」と題されたこれらの出

版物の多くは、主にバラモン司祭や家庭の女性のためのプロト儀礼の手引きとして書かれ、物語としての関心も手伝い、広く普及した。本稿では、これらの一連の民間に流布したプロト物語の編纂書をプロト・コタの「普及本」と名づけるが、これらの普及本は数も多く様々な形態が見られた。しかし、儀礼についての批評や分析は行われていないという点で、ベンガルの各地に伝承された口頭伝承の収集・研究というよりも、一般のヒンドゥー教徒に向けて書かれたことは明らかである。これらの普及本の中で最も初期のものは、オゴルナト・チョトパダエによる『メエリ・プロト (女性のためのプロト)』とされる¹¹。その他に、ラムプラン・グプトの『プロトマラ (プロトの花飾り)』、編者不詳の『プロトマラ・ビダン (プロトの花飾り集)』などが知られている¹²。その後、著名なプロト・コタの「普及本」としては、ゴネシュチョンドロ・ムコパダエの『娘のプロトの歌言葉 (*balika-brater chara*)』、昔話の編者としてつとに知られるドッキナロンジョンの『おばあさんのお皿 (*thandidir thale*)』、さらに、ポロメシュ・プロションノ・ラエの『女性のプロト物語 (*meyeli bratakatha*)』、ピノエ・クリシュノ・ムコッパダエの『挿絵入りの女性たちのプロト物語 (*sacitra meyeder bratakatha*)』、そして、アシュトシュ・モジウムダルの『女性たちのプロト物語 (*meyeder bratakatha*)』などである。現在では、最後に掲げたアシュトシュ・モジウムダルの『女性たちのプロト物語』が、ベンガルの最も良く知られたプロトの普及本となっている。近年、カルカッタを中心として相次いで新たな編集本が出版されているが、多くはこの書に体裁を倣っている。

ところでベンガル地方では、このようなプロト儀礼への関心は、民族運動の高まりを背景としたものであった¹³。それまでのヨーロッパ人によるインド文化への言及ではなく、ベンガル人自身による民族文化への記述が、このような民間の伝承に対しても行われるようになる。そのような中で、詩人のラビンドラナート・タゴールをはじめとした、多くの学者や小説家によるプロト儀礼への言及がなされるようになった。この時代の学者・作家の間でのプロト儀礼についての関心は高く、プロト儀礼、あるいはプロトの物語についての様々な注目がなされた。その主な名前を挙げると、ロビンドロナト・タクル (ラビンドラナート・タゴール)、オボニンドロナト・タクル、ドッキ

ナロンジョン・ラエ、ニハロンジョン・ラエ、ディネシュ・チョンドロ・シエン、アシュトツシュ・バツタチャルヤ、ビノエ・クマル・ゴーシュなどである¹⁴。

例えば、1905年のスワデシ運動に際して、ロメシュ・シュンドル・トリベディ[1864—1941]は、プロト儀礼を模倣し、女性たちに誓いのために籠の火を落とすことを呼びかけている。1920年には、ディネシュ・チョンドロ・シエンは、『ベンガルの民話』を著し、ベンガルの民話の4つの形式のひとつとして、プロトの物語（プロト・コタ）を論じている[Sen 1920:246-61]。T. M. チャタルジの『アルポナ：ベンガルの儀礼装飾』と題された本は1948年の出版だが、アルポナ装飾の研究に関連しプロト儀礼の意義に付いて言及を行っている[Chatterjee 1948]。ニハロンジョン・ラエの『ベンガル人の歴史』の中では、プロト儀礼の様々なヴァリエーションについて言及がなされ、プロト儀礼の分類が試みられている[Ray 1949:483-86]。

しかし、これらの研究者によるプロト儀礼の研究書として、体系的で包括的に儀礼を論じたプロト儀礼研究の嚆矢となる書物は、オボニンドロナト・タクルの『ベンガルのプロト』[Thakur 1943 初版 1919年]である。オボニンドロナトは、横山大観とも親交が厚く、日本画の手法をインド近代絵画の技法に取り入れたことでも知られている。このオボニンドロナトによるプロト儀礼研究は、次節で詳しく検討する。

ところで、このオボニンドロナト・タクルは、「アルポナ」と総称されるプロト儀礼に派生する民俗意匠の美しさやその神秘性に注目した作家という点でも重要である。その儀礼装飾への審美的な評価の積み重ねによって、「アルポナ」として知られる装飾様式の美学的な観点での、今日の私たちの認識は格段に深まったといえる。たとえば、シャンティニケトンのタゴール国際大学では、芸術学部の正規のコースとして、このアルポナ装飾の実習が行われるようになっている。また、バングラデシュにおいても、政府の公式行事などの舞台を飾るアルポナの意匠は、国民文化を象徴する装飾モチーフとして欠かせないものとなっている。プロト装飾は、今日では東西のベンガル文化の民俗芸術を代表するモチーフと見なされるようになっている。同時にそれは、たとえばイタリアのゴルチエのデザイナーズ・ブランドにも取り

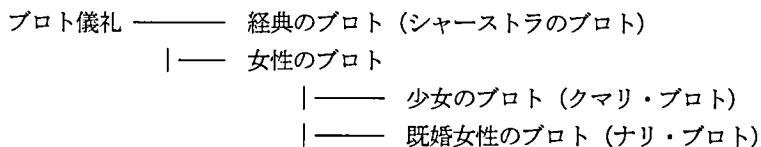
入れられ、ネクタイやスカーフのデザインにも翻案されたように、国際的にも広く認知されるようになってきているのである。

3 プロト儀礼の分類

(1) オボニンドロナトの視点

プロト儀礼の目的論的解釈の問題についてはすでに触れたが、以下では本稿の主題となるプロト儀礼の分類体系に関して、より詳しく従来の研究を検討する。すでに述べたように、ベンガルのプロト儀礼の多様な性格に注目して、初めてその体系的な記述を行ったのは、詩人タゴールの甥にあたるオボニンドロナト・タクルである。彼は、今日では古典的な著作となった『ベンガルのプロト』の中で、プロト儀礼が、3つのカテゴリーに分類できることを論じている[Thakur 1943:5-7]。この時の分類は、①経典のプロト（サンスクリット語で書かれたヒンドゥー教聖典：シャーストラ）、②既婚女性のプロト（ナリ・プロト）、③少女のプロト儀礼（クマリ・プロト）であった。これは、より厳密に言うと経典のプロトとそれにとらわれない女性たちによって行われるプロトに大別され、後者はさらに既婚女性が行うものと、未婚の女性が行うものとに区分される。これを図-1にまとめると、以下のようになる。

図-1 オボニンドロナトのプロト儀礼の分類



ヒンドゥー教徒の社会規範を規定したサンスクリット語の文献である『マヌ法典』は、女性が儀礼を開始するためには、それが未婚の女性であれば父親に、既婚者であれば夫に、寡婦であればその息子に、儀礼の開始の許可を得るように求めている。これとは対照的に、ベンガルのプロト儀礼では、女

性の意志に基づく自由な参与が可能なものが多い。このような「経典（サンスクリット語の聖典）」の儀礼と対比される村落のプロト儀礼という観点は、このオボンドロナトの指摘によって、その後のプロト儀礼に関心を持つ多くの研究者の間で認められるものとなった。オボンドロナトは、実際にはこのような経典的か非経典的かといったプロトの区別は現実には難しいものであると考え、むしろ実際のプロト儀礼は、部分的に「経典」の影響を受けつつ、一部には「純粋なプロト（カティ・プロト）」の要素を残しているといった状態であると述べている。これらの分類に従うと、クマリ・プロトがより純粋な形態を多く残し、既婚女性のプロトには、「経典」で規定されたプロトの要素が多く含まれているという違いも指摘されている。しかし、ベンガルのプロト儀礼が、サンスクリット語の「経典」に描かれる儀礼的な規範と対比的な性格を持つとする理解は、その後の多くの研究者によって注目されるようになった。例えば、ションコル・シェン・グプタは、特に経典に規定されたプロトに対してそれにとられない女性によるプロト儀礼を対置させて、「経典」のプロトと伝承されるプロト（プロチョリト・プロト）の区分を強調している[Sengupta 1970:100-1]。

ところで、オボンドロナトが、女性の行うプロト儀礼を、「経典」の儀礼から分離させて独自の儀礼領域としたのは、後代のパラモンの聖典学者による潤色を受けた儀礼と対置させることで、女性の儀礼の中により古層のベンガルの儀礼伝統を見出そうとしたためであった。特にオボンドロナトは、少女の儀礼（クマリ・プロト）であっても、経典儀礼によって後に潤色される要素があることを認めながら、そこにサンスクリット語の経典が編纂される以前の、古来の儀礼伝承が残存しているという視点を強調した¹⁵。ここには、オボンドロナトの独自の文化史への視点が指摘できる。彼の視点は、いわば、現在観察されるプロト儀礼を、すべて過去に存在したと想定される理想的な姿の残像と捉える点で、逆説的な進化論的図式に基づいていたと言えるのである。

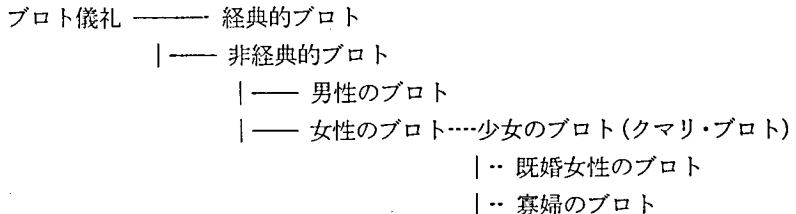
（2）分類の体系

このようなオボンドロの先駆的な研究を踏まえることで、その後、シュ

ディル・ロンジョン・ダスは、『ベンガルの民俗宗教』[Das 1953]や『民俗宗教の儀礼』[Das 1958]などの一連の著作で、プロト儀礼の体系的な分類を試みた。ダスは、特にオボニンドロナトの著作をプロト儀礼の学術的研究の嚆矢と位置づけて評価すると同時に、より実証的で包括的な研究の必要性を指摘した。実際のプロト儀礼を分析する際に、ダスは、經典的な要素は現実の多様な儀礼の中に交じり合っており、それを厳密に区分することは難しいと述べているが、やはり少女の儀礼(クマリ・プロト)が、非アーリヤ文化の要素を多分に含んでいると述べた。従来、「素朴な儀礼」と見なされた少女の儀礼に、むしろ古代の宗教的な伝統が純粋な形で見られるとする。このような見解は、プロト儀礼が古代の一種の疑似科学であり、自然への適応の手段としての一定の合理性を持つ体系であると考えた、ピノエ・ゴージュの観点にも繋がるものといえるだろう¹⁶。

ダスは、プロト儀礼の分類に関しても、經典的プロトと非經典的プロトとを対置させることで、前者をアーリヤ文化(ヴェーダなどのインド古代文明を導いたと考えられる印欧語族の文化)、後者を非アーリヤ文化(ドラヴィダ語族系統などのアーリヤ文化流入以前の文化)を代表するものとして整理した。更に非經典的プロト儀礼を男性の行うプロト(プルシャリ・プロト)と女性の行うプロト(メエリ・プロト)に区分し、後者を更に、娘の行うプロト、既婚女性の行うプロト、寡婦の行うプロトの3つに区分することで細分化した。これらの区分を図示すると、図-2のようになる。

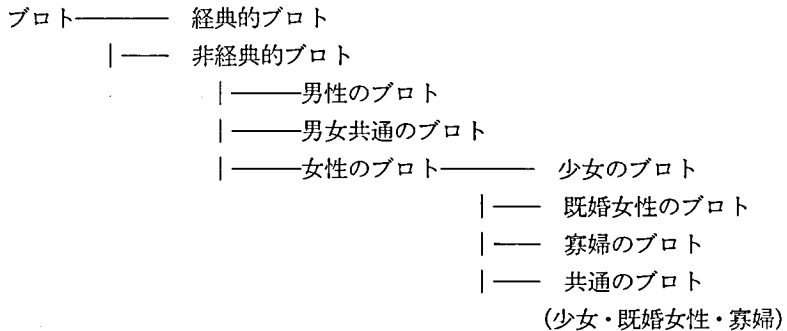
図-2 S.R.ダスのプロト儀礼の分類



図のように、分類に男性を加えることなどで、農村部で実践されるプロト儀礼をジェンダーの視点を含めて包括的に整理しようとした点で評価できる。また、アーリヤ文化と非アーリヤ文化という形で、インダス文明に遡る南アジア文明史の中に、広く儀礼の歴史的背景を位置付けた点も注目される。しかし、基本的にはオポニンドロナトの経典と非経典的儀礼の対比を越えるものではなかった。

このような中で、1998年に刊行されたシラ・ボシャクによる、『ベンガルのプロト儀礼(*Bangla Brataparban*)』は、口頭伝承を中心に地域ごとに多様なプロト儀礼の資料を検討し、体系的なプロト儀礼論を試みたものとして重要である。ボシャクは、今日の西ベンガル州では民俗文化研究が盛んな研究施設のひとつであるコッラニ大学の民俗学部の助教授であり、本書は発刊されるとすぐに、ベンガルでは権威のある文学賞であるアノンド賞を受賞した。ベンガル人によるプロト儀礼研究も踏まえた、今日の現地の研究者による代表的なプロト儀礼論となっている。この中でボシャクは、プロト儀礼を単にベンガル地方の民俗伝統と見なすのではなく、広く南アジア全域に分布する女性に関わる儀礼伝統として、整理している点で興味深い。いわば、南アジア世界におけるプロト儀礼の地誌的研究の集大成の試みとなっている。このようなボシャクの提示したプロト儀礼の分類をまとめると、図-3のようになる。この図からもあきらかなように、よりジェンダーの構成には注目が払われてはいるものの、その分類の基本的な枠組みは、オポニンドロナト以来の文字伝承と口頭伝承との対比という既存の分析視点を越えるものではない。たとえ資料の渉獵が広範で通文化的なものであったとしても、インテンシブな儀礼の内在的な理解という意味では限界が指摘されるだろう。サンスクリット語を理解し、歴史的な検証が可能な研究者の視点では明白な分類体系も、それを実践する当事者にはどのように認識され、一連の行為体系として実践されているのかという点では、なお検証の余地が残されているのである。

図—3 シラ・ボシャクのプロト儀礼の分類



4 調査地の概況

本稿で事例としている調査村は、西ベンガル州ボルドマン県モンゴルコート地区のキログラム村(Kshiragram, J.L.No.127,128 and 129)である。ボルドマン地方は、インド東部のベンガル地方でも肥沃な水稲耕作地帯としてムガル朝の時代からその名を知られていた。調査地は、このボルドマン県でも東部の生産性の高い農村地帯にあり、冬作を主体とし二毛作やラビ作も可能な農業村落となっている。この村は、中世の聖者チャイタニヤで知られるマヤプール・ノボディーブから わずか 30 キロほどの地点に位置し、中世にはオッジョイ川の河口の港としても栄えたカトワからも近いという地の利を有していた。このモンゴルコート地区の中心地もオッジョイ川の港町であったモンゴルコートにあるが、ここは中世にはウッジャインと呼ばれ、様々な『吉祥詩(モンゴル・カッポ)』にその名が登場する。とりわけ、モノシャ・モンゴルのヒロイン、ペフラの結婚式が行われる所として、このウッジャインの町が言及される。隣のブロック(行政地区)には、チャイタニヤが巡礼で訪れたコルイ村もあり、この地域が中世から豊かな文化が花開き、栄えていたことをうかがわせる。

村落は、18のカースト集団から構成されており、人口は4,263人(1991年センサス)である。内訳は、男性 2,191人、女性 2,072人であり、世帯数は

729 世帯を数える。また、指定カースト成員の人口は 1,930 人、指定ドライブは 28 人になる。指定ドライブ人口は、すべてサンタル人であり、主に独立後に季節労働者が定着し居住人口となった。村落のカースト世帯別人口構成を、次の表-1 に提示している。人口規模からいえば、カーストの分布も平均的であり、ベンガルにおいては中規模の村落といえるものである。

調査村の人口構成を見ると、三つの勢力が顕著である。すなわち、村落社会における支配的な土地所有カーストであるウグロ・コットリヨ (*Ugra-Kshatriya*) が最大の人口規模を有し、次に村落での主要な労働力を提供するバグディ・カースト (*Bagdi*) がそれに続き、さらに村落寺院やその他の宗教儀礼を主導するバラモン階層が第三の人口規模を有している。これらの主要な三つの集団を合計すると 480 世帯となり、これは村落全体の 73% を占めている。この 3 つの集団は、それぞれに特徴的な性格を有しながら、村落社会の中で不可欠の相互依存の関係に置かれている。そのため、次にこの 3 つのカースト集団について、その関係を概観してみたい。

表-1 キログラム村のカースト構成

カースト名	伝統的職能	今日の主な生業	世帯数
ウグロ・コットリヨ	クシャトリヤ	地主	217
ジャナ・アグリ	(武人階層)		84
シュタ・アグリ			133
バグディ	雑役・駕籠かき	農業労働	178
バラモン	司祭	司祭・地主	85
ムチ	皮革カースト	農業労働	71
ゴエラ	牛飼いかースト	牛飼いか・農業	50
パウリ	雑役全般	農業労働	11
タンティ	機織カースト	機織・農業	7
ドム	火葬・死体処理	農業労働	6
サンタル	少数民族	農業労働	6

シュットロドル	大工カースト	大工	4
カヤスト	書記カースト	地主	3
ベネ	香辛料商人	お菓子屋	3
ハリ	清掃・産婆	農業労働・産婆	3
ナピト	床屋カースト	床屋	3
パイテ	太鼓叩きカースト	太鼓叩き	3
モエラ	お菓子作りカースト	商店	2
マラカール	花輪作りカースト	花輪作り	2
シュンリ	酒作りカースト	酒作り	1

合計 655

この3つのカーストの関係を概観すると、次のようになる。村落のパラモン司祭の世帯は、いわゆる「ジャジマニ関係」において、ウグロ・コットリヨとの緊密な儀礼的・経済的関係を結んでいる。各ウグロ・コットリヨの世帯は、ジャジマンとして、一族の司祭 (*kula-purohita*) との世襲的な関係を結んでいる。儀礼的権威を体現するパラモン司祭は、村落祭祀において宗教儀礼を主導する立場にあり、その主要なパトロンは、この村落の最大の地主勢力であるウグロ・コットリヨとなっている。また、バグディ・カーストは、村落地主であるウグロ・コットリヨやパラモン世帯との継続的な雇用関係に置かれている。その関係は、かつては小作人や年季奉公人としての世襲的形態が多くみられたが、今日では農業労働者としての日雇い形態が中心となっている。村落の最大の地主勢力のウグロ・コットリヨに対して、ここではバグディ・カーストは、村落地主に労働サービスを提供する、土地無し世帯として対比的な関係にある。同時にバグディ・カーストは、村落内の指定カースト集団としては最大の規模を誇っており、カースト的地位において最上位に立つパラモン司祭に対しても、儀礼的な対比関係に置かれている。

また、村落の地理的構成を見ると、村落寺院であるジョガッダ女神寺院を中心としてパラモンの世帯が集中し、その周りをウグロ・コットリヨが、さらにバグディ・カーストやその他のサービス・カーストが同心円状に取り

巻いていることがわかる。さらに村落の周辺部には、ムチヤバウリなどのより低位のカースト集団が散在している。このような地理的分布と対応するように、村落内の社会的・宗教的な役割も、中核となるバラモン司祭から、周縁的な役割の低カーストへと分散しているのである。

これらのことは、特にバラモン司祭を中心とする村落における家庭祭祀の実践体系が、豊かに組織され、また今日に至るまでも強固に保持されて来た事情を説明する。この古い女神寺院を中心とした調査地の特殊性が、ベンガルの農村社会においても、例外的に多様なプロト儀礼の実践体系を構成し、各世帯が競合する緊張感のある実践体系として、今日までも伝えることを可能としている。したがって、このような複雑に構成されるプロト儀礼の実践体系は、ベンガル地方でも珍しい事例である点は注意すべきであろう。言い換えると、シラ・ボシヤク[Basak 1998]のような地誌的な資料の一般化ではなく、この儀礼の持つ宗教的实践のもたらす意味が最も先鋭化された形で提示されているという意味で、民族誌的資料としての価値を見出すこととなるであろう。より具体的には、次の4つの観点が指摘できる。

第一は、村落のジョガッタ女神寺院を中心に、祭祀に奉仕する9家の大きなリネージに分かれる寺院司祭（セバイト司祭）の存在が、儀礼規範の維持に大きな役割を果たしていること。第二は、それぞれのバラモン司祭の家が、村の最多数を占める地主層であるウグロ・コットリヨをジャジマンに持つことで、財政的な基盤を維持することが出来たこと。第三は、村落寺院の祭祀組織が、村落社会の強固な基盤として維持されており、それはザミーンダリー制度廃止によっても、なお存続していること。そして第四は、村落の様々な祭祀が、この寺院儀礼によって強力に統合され維持されていることである。そのため、特定の大きな家が没落するということなしに、細分化されたバラモン司祭の家で、村落の儀礼伝承が維持されると同時に、その司祭の家では娘たちに今でも熱心にこれらのプロト儀礼を行わせているのである。調査地がヒन्दウー教のシャークタ派の聖地である女神の聖地（ピート・スタン）として、古くから信仰を集める古い寺院を擁しているという特殊な事情が、このような事態を可能としていることは間違いないであろう¹⁷。

5 プロト儀礼の普及本について

次に、先述のプロト儀礼の普及本について検討する。この普及本は、儀礼の所作そのものよりも、より多くプロト儀礼に際して語られる説話的な物語を採録するテキストからなっている。すなわち、ベンガル語で一般に「プロトの物語（プロト・コタ）」と呼ばれる口承文学のジャンルがそれである。これらの普及本に採録された説話的な物語（プロト・コタ）の内容を、それぞれに突き合わせてみると、いくつかの興味深い点が指摘できる¹⁸。

ひとつは、主要な物語に関しては、驚くほどその内容の共通性を見て取ることができることである。例えば、ラクシュミー女神の物語やシオスティ女神の物語のように、ベンガルで広く知られたプロトの物語については、細部の描写や会話の口調が異なっているだけで、そのストーリーの基本的な枠組みは、非常に類似性の高いものとなっている。因果応報などの主題を伝える説話集として眺めれば、ほとんど共通する伝承系統から派生する物語群として捉える事も可能である。このことは、カルカッタ本とダッカ本とにおいても異なるところはない。

また、これらの現在入手できる普及本はすべて、いつどの地方のどのような人物からの採話であるのかがまったく記されていない。ここには、活版印刷が普及される以前の、ナツメヤシの葉などに記述された古文献と同様の匿名性が指摘できる。すなわち、現在残されているこれらの普及本から、ある時期にある地方で影響力を持った物語やその語り手の存在を想定する事は、困難であるといえる。活版印刷による普及本の流布に際して、アシュトシュ・モジウムダルなどは、あくまでも編者として関与しているのである。しかし同時に、このような普及本の一般化という現象自体が、現在ではこれらの物語の民間での伝承にも、大きな影響をもたらしていることには注意しておく必要があるだろう。

この点に関して、村ではすでにこのようなプロト儀礼を完全に暗唱して物語る者はいなくなっていることが挙げられる。村の母親が、娘などにプロト儀礼を教える場面でも、このような普及本を手引きとして、マントラを暗唱させることが多くなっている。また、プロトの物語に関しては、一連の儀礼の最後の満願に際し、司祭を招いてそれを聞くことが最も一般的な形である。

そのため、たいてい村の司祭は、ドウルガ・プジャで『チョンディ』を朗唱するように、これらの普及本を利用して、村人に物語るのである。ただし、これらのことは、時に複雑な構成を持つプロトの物語とマントラに関して言えることで、儀礼の所作や儀礼の次第、祭具に関しては、逆に、これらの普及本とはまったく異なる所作や祭具が、村の古くから伝えられた様式として伝承され、儀礼に用いられている。

確かにプロトの物語の中には、特定の禁忌や祭具が何故必要となるのかを、物語の中に織り込んで説明することが多い。しかし、実際には村人の多くは、それを意識して儀礼を行うことは少ない。儀礼を主導する司祭においても、個々の儀礼で用いられる祭具や儀礼次第について明確な知識を持ちながら、プロトの物語に関してはほとんど知識を持たない場合も多い。プロトの物語は、確かにプロト儀礼の一部を構成しているが、村人にとっては、その物語の内容が必ずしも直接に儀礼次第と対応するものとして意識されたり、語られたりする訳ではない。このことは、女性たちが、個々のプロトに対して決められた、特定の食物や水への禁忌を明確な知識として持ち、実践していることとは対照的である。その儀礼の祭具や所作は、むしろ伝承する女性によって異なるという多様性をみせ、普及本の記述とも異なり、母親から受け継いだ所作を守る者が多いのである。

ところで、これらのプロト儀礼に関わる普及本のうち、最も広く流布し評価が高いのはアシュトシュ・モジウムダルの『女性たちのプロト物語 (Meyeder Bratakatha)』である。その理由は、一般の人々への手引きとして、活版印刷の普及本として流布しているプロト儀礼のテキストの中では、比較的初期のものであり、これらのテキストの中では、唯一、通年分類のみでなく、担い手などによる内容分類が試みられている点、さらに、この本に採用されている物語の語りの一貫性とその味わいといったものが指摘できるからである。物語の語り口調は、いかにも村の古老が口伝えにしているままに再現したという趣があり、『プラーナ』などの古典サンスクリットの話やバラモン自身による潤色も比較的少ないように思われる。それに対して、最近出版されている本の多くは、教訓的なストーリーの強調など女性や子供向けに意識的に編集されている部分が多く指摘される。

6 プロト儀礼の通年構成

(1) 普及本と調査地の事例

現在、一般に入手できるベンガル語で書かれたプロト儀礼に関わるテキストとして、8種類のテキストを分析に用いた。そのうち、コルカタ（カルカッタ）刊行のものが7点、ダッカのものが1点である。先述のように、英領期からベンガルの一般の人々のための手引きとして、これらのテキストの編纂が進められた。今日一般に広く普及しているこれらのテキストは、学術的なものではなく、実際に儀礼を実践する女性たちやそれを指導する司祭のための手引きとして書かれており、廉価で入手できる普及本となっている。口承で、随時、地域ごとに伝承されていた物語やマントラ、さらには儀礼の所作や用いられる祭具などを細かく記述し、一冊の説話集、及び儀礼の手引き書として編集され、まとめられている。そのため、これは現実のプロトの語りや所作をそのまま忠実に記録したというよりは、一般向きに編集し直され理想的な姿に手を加えられた結果となっている。

表-2では、これらの普及本ごとに掲載されプロト儀礼の内容を批判的に検討するため、年間に12の月の巡りに従って分類し対比的に提示したものである。表の最後には、分析に用いた8種の普及本のリストを掲げている。また、リストの最後のIは、調査村で実際に観察されたプロト儀礼の項目を、これらの文献に現れたプロト儀礼の題目とつき合わせ、対比したものである。表中の<○>は、普及本に記載されている、あるいは調査村で実践されていることを示す。また、参考にベンガル暦による季節の区分と、それに対応するおよその西暦を表-3にまとめた。

表-2 プロト儀礼の通年構成

	プロト儀礼	A	B	C	D	E	F	G	H	I
	ボイシャク月									
I	ホリシュ・モンゴル・チョンディ <i>haris-mangakcandi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	

2	シブ・プロト <i>sib-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	聖なる池のプロト <i>punyipukur</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	10の人形のプロト <i>dasputul</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	ビシュヌ神の御足のプロト <i>haricaran</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	オッシュロット樹の葉 <i>ashwattha-pata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	?
7	牛飼いのプロト <i>gokul-barata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	世界のプロト <i>prithibi-barata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	ゴチャノ・プロト(果物/稲) <i>gachano-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○		○
10	隠された宝のプロト <i>guptadhan-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	
11	日々のシンドゥール <i>nitya-sindur-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○		△
12	ショングダモニ・プロト <i>sanddhyamani-brata</i>	○	○	○		○	○	○	○	
13	バナナと豆のプロト <i>kalachara-brata</i>	○	○	○		○	○	○		
14	ショウガとターメリックのプロト <i>ada-halud-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○		
15	ルブとターメリックのプロト <i>rup-halud-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○		
16	玉座に遊ぶプロト <i>adar-sinhasan-barata</i>	○	○	○	○	○	○	○		
17	不壊のシンドゥール/果物/壺のプロト <i>akhsay-sindur/phal/ghat brata</i>		○	○	○	○	○	○		
18	蜜/ギー/漬物/鏡のショングランティ・プロト <i>madhu/grit/chatu/darpan-sankranti-brata</i>		○			○	○	○		
19	テジュ・ドルボン・プロト <i>tej-darpan brata</i>		○			○	○	○		
20	ジャチャボン・プロト <i>jaca-pan brata</i>		○			○	○	○		
21	菓子/蓮/果物のボイシャク月満月のプロト <i>misti/padma/phal/baishakhi purnima brata</i>		○			○	○	○		
22	ショロ・コラ・プロト <i>sala-kala brata</i>		○			○	○			
23	不壊のクマリ/トゥリティヨのプロト <i>akshay-kumari/Tritiya brata</i>		○	○	○	○	○	○	○	○

24	水/ご飯/果物のション克蘭ティ <i>jal/anna/phal-sankranti</i>		○	○	○	○	○	○	○	
25	ボイシャク・チョンパク・プロト <i>Baishakh canpak brata</i>		○	○	○	○	○	○	○	
26	エヨ・ション克蘭ティ <i>eyo sankranti brata</i>			○	○	○	○	○	○	○
27	ボンチョムリト・プロト <i>panchamrit brata</i>						○			
28	ションボド・ナラヨン・プロト <i>sanpad narayan brata</i>									○
ジョイシュト月										
29	森のショステイ <i>aranya-Sasthi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	チョンディ女神の勝利 <i>jay-Mangalcandi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	チョンパと白檀のプロト <i>canpacandan-brata</i>		○	○	○	○	○	○		
32	モンゴル・ション克蘭ティ <i>mangal-sankranti</i>		○	○	○		○		○	
33	ジョシシュト・チョンパク <i>jyaistha-canpak</i>		○	○	○	○	○	○		
34	サビトリ・チョトゥルドシ <i>sabitri-cturddashi</i>		○	○	○	○	○	○	○	
アシャル月										
35	ビポッタリニ・プロト <i>bipattarini-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36	モノロト・ディティヨ・プロト <i>manorath dwitiya brata</i>		○	○	○	○	○	○	○	
37	サート・ボンチョミ <i>sat-panchami</i>		○	○	○	○	○	○	○	
38	ションコト・モンゴルバレル・プロト <i>sankatmangalbarer brata</i>		○	○	○		○		○	
39	ビビョシュボット・ショプトミ・プロト <i>bibaswat saptami brata</i>		○	○	○	○	○	○		
40	オンパチ・プロト <i>ambhubaci-brata</i>									○

スラボン月										
41	ロトン・ショステイ <i>lotan-Sasthi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
42	モノシャ女神のプロト <i>manasa-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
バドロ月										
43	ラクシュミー女神の祭祀 <i>Lakshmipuja</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
44	チャブラ・ショステイ <i>capra-Sasthi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	
45	ジョンモオシュトミ・プロト <i>janmasthami-brata</i>		○	○	○	○	○	○	○	
46	ラダオシュトミ・プロト <i>radhasthami-brata</i>		○	○	○	○	○	○	○	
47	ドウルボシュトミ・プロト <i>durbbasthami-brata</i>		○	○	○	○	○	○		
48	タールノボミ・プロト <i>talnabami-brata</i>		○	○	○	○	○	○		
49	オノント・チョトウルドシ・プロト <i>anant caturddashi brata</i>		○	○	○	○	○	○	○	
アッシン月										
50	コジャゴリ・ラクシュミー女神の祭祀 <i>kojagari Lakshmi puja</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
51	ドウルガ女神のショステイ <i>Durga Sasthi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
52	ショウバグゴ・チョトウルティ・プロト <i>saubhagya caturthi brata</i>	○	○	○	○	○	○	○		
53	ジタシュトミ・プロト <i>jitasthamir brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	
カルティック月										
54	ラクシュミー女神の祭祀 <i>Lakshmipuja</i>	○	○		○	○	○	○	○	○
55	ジョムプクル・プロト <i>jampukur-brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	△
56	クル・クルティ・プロト <i>kulkulti-brata</i>			○		○				
57	ボク・ボンチョミ・プロト <i>bakpanchami-brata</i>			○		○	○	○		
58	ボイクントウ・チョトウルドシ		○			○	○	○		

	<i>baikunth-caturddashi</i>								
オッガン月									
59	クシェトロ・プロト <i>kshetra brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	
60	ムロ・ショステイ <i>mula-Sashti</i>	○	○	○	○	○	○	○	
61	<i>kalui Mangalcandi/Phulai Mangalcandi</i>	○	○	○	○	○	○	○	
62	シヨンコット・モンゴルバル <i>sankat Mangalbarer katha</i>	○				○		○	
63	ナタイ・モンゴルチョンディ <i>natai Mangakcandi</i>	○	○	○	○	○		○	○
64	セジュティ・プロト <i>senjuti brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
65	ラルドウルガ・プロト <i>Raldurga brata</i>	○	○	○	○	○	○		
66	イトウル・プロト <i>itur brata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
67	マ・ゴト・ショステイ <i>ma-gotha Sashti</i>		○						
ポウシュ月									
68	ラクシュミー女神の祭祀 <i>Lkshmi puja</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
69	パタイ・ショステイ <i>patai-Sashti</i>	○	○	○	○	○		○	○
70	シュオ・ドウオル・プロト <i>suyo duyor brata</i>	○	○	○	○	○	○		
71	トウシュ・トウシュリ・プロト <i>tuns-tusli brata</i>	○	○	○	○	○		○	
72	ラルドウルガ・プロト <i>Raldurga brata</i>	○							
マヅ月									
73	シトル・ショステイ <i>shital-Sashti</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
74	シヨンコト・モンゴル・チョンディー <i>Sankat Mangalcandi</i>	○		○		○	○	○	
75	ラルドウルガ・プロト <i>Raldurga brata</i>	○							
76	バイミ・エカドシ・プロト <i>bhaimi ekadashi brata</i>		○	○	○	○		○	○
ファルゲン月									
77	シヴァラトリ・プロト <i>shibratri brata</i>	○		○	○	○	○	○	○

78	ラルドウルガ・プロト <i>Raldurga brata</i>	○	○							
79	ゴビンド・ダドシ・プロト <i>gobind dwadashi brata</i>			○		○				
チョイトロ月										
80	ラクシュミー女神の祭祀 <i>Lakshmi puja</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	オショク・ショステイ <i>Ashok-sasthi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
82	ニール・ショステイ <i>nil-Sasthi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○
83	ラム・ノボミ・プロト <i>ramnabami brata</i>			○	○	○		○	○	○

<文献のリスト>

- A: Ashtos Majumdar(ed.), *Meyeder Brat-katha*,
Calcutta: Deb Sahitya Kutir (Pr.Ltd.),1992.
- B: Pandit Prabar Gopalcandra Bhattachary (ed.),
Baromaser Meyeder Bratakatha, Calcutta: Nirmal Buk Ejensi.
- C: Bibhutibhusan Bhattacharyya (ed.), *Meyeder Bratakatha*,
Calcutta: Mahesh Pablikeshan,
- D: Shashibhusan Kabiratna (ed.), *Meyeder Bratakatha*,
Calcutta: Orient Library.
- E: Hirannay Bhattacharyya(ed.), *Meyeder Bratakatha*.
Calcutta: Rajendra Library.
- F: Suren Bhattacharyya (ed.), *Meyeder Bratakatha*.
Calcutta: Saha Book Stool.
- G: Kalikishor Bidyabinod (ed.), *Brihat Baramese Meyeder Bratakatha*,
Calcutta: Akshay Library.
- H: Phanibhusan Cakrabarti (ed.), *Barameser Meyeder Bratakata*,
Dhaka: J.K.Pres and Pablikeshans, 1996.
- I: 調査地で観察されたプロト儀礼

表-3 ベンガルの月と季節の対応

季節の名前	ベンガルの月の名前	西暦の月
夏季 (グリショ・カル)	ボイシャク ジョイシュト	4-5月
雨季 (ボルシャ・カル)	アシャル スラボン	6-7月
秋季 (ショロト・カル)	バドロ アッシン	8-9月
露季 (ヘモント・カル)	カルティック オッガン	10-11月
冬季 (シト・カル)	ポウシュ マグ	12-1月
春季 (バショント・カル)	ファルグン チョイトロ	2-3月

表-2に掲げられたブトロ儀礼のリストに基づいて、初めにいくつかの例を具体的に検討したい。それぞれのブトロ儀礼のうち、それを掲載した本によって、儀礼についての解釈が異なるため、分類の仕方に異同が見られるものがある。例えば、エヨ・シオン克蘭ティやニット・シンドゥール・ブトロなどは、チョイトロ月の「シオン克蘭ティ (ベンガル暦の最終日)」に始まり、毎月の最終日であるシオン克蘭ティごとに、12ヶ月行うのが本来の姿と考えられている。しかし、多くのブトロ儀礼書では、これを特にボイシャク月の儀礼として言及している。一般には、月ごとにバラモン司祭を招き、たくさんの供物を用意してこれらの儀礼を毎月行うのは困難なことが多く、調査地でもこの儀礼は1年に1度、ボイシャク月に行えば良いとされている。多くの儀礼書で、この儀礼がボイシャク月に編入されているのは、このような事情を反映したものと考えられる。

また、調査地で観察された儀礼の中で、このような儀礼書のどの儀礼に厳

密に対応するのか不明な儀礼も見られた。そのうち、オンバチ・プロトは、ことにアッサム地方における農村部の女性の習俗と結びついて、つとに知られている。調査地においてもこのオンバチのプロトは、寡婦（ビドワ）が行う断食として、重要である。女神の聖地の総本山とも目されるゴーハティーのカマッカー女神寺院（カーマーキヤー女神寺院）では3日間の断食が守られるが、調査村では一日のみの断食が課せられる。

また、ニット・シンドゥール・プロトやカルティック月のジョムプクル・プロトのように、かつては調査地で行われていたが、調査の時点では、もう廃れて行われなくなってしまっている儀礼もある。これについては、表の中では<△>の印で表している。さらに、調査地で聞き取りを行った資料には、ジョム・プクルのように、若い頃には行っていたが今では行われなくなったという事例もある。その場合には、可能な限りその話から、かつての儀礼の再構成を試みるようにした。また、オッシュット・パタ・プロトは、村落のガーチ・プジャ（祭祀）との類似性が認められるため、<?>で表示し、対応させた。しかし、一般にはオッシュットの葉を頭頂にいただき、未婚の娘たちが毎朝沐浴を行うオッシュット・パタ・プトロは、厳密にはガーチ・プジャとは異なっている。村落でのガーチ・プジャは、一般に既婚女性が担い手となることが多いが、その担い手の制限はないこと、村の定められたオッシュット樹の根元の祭壇で行われること、そして、毎朝この樹木の根元の祭壇に沐浴の水を掛けて、オッシュット樹への沐浴を行うなどの点で、微妙に異なっている。ともかく、細部の異同にも関わらず、調査地で実際に行われている儀礼が、儀礼書の上ではどのように対応しているのかについては、この表で一定の対比が可能となる。ただし、寡婦のプロト儀礼に関しては、特定の年中行事としての儀礼以外は、このような普及本に具体的な儀礼として言及されないことが一般的であり、独立した儀礼群を構成すると認識されている場合が多い。そのため以下では、調査地の資料に基づいて、寡婦のプロト儀礼の体系を検討する。

(2) 寡婦のプロト（ビドワ・プロト）

ヒンドゥー社会における寡婦（ビドワ）の立場の厳しさは、つとに知られ

ている。たとえ年齢は若くとも、ひとたび夫を亡くして寡婦となったら、老齢のお婆さんと同じように、ひたすら神を祀る清貧の宗教生活に入らなければならぬとされる。美しい色柄のサリーを身にまとうことも出来ず、腕輪や耳飾りなどの装飾品で身を飾ることも許されない。食物の禁忌も非常に厳しく、基本的に肉類や魚類などの一切の殺生が戒められる。それだけでなく、インド料理のスパイスとして欠かせないニンニクやタマネギなどの根菜類も忌避される。いわば、美味で栄養価の高い高級食材の多くを断つという意味で、恒常的に断ち物をしているともいえる。そのため、調査地では、寡婦の取る食事は、必ず別に作られており、それが単なる食事内容の規制に留まらないことは、料理に伴う接触の忌避の慣行からも窺える。

例えば、世帯に寡婦がいる場合には、必ず他の家族成員と異なる食器や鍋、そして包丁などの調理器具を用意する。すなわち、すでに肉の料理に用いられて包丁を使うと、その不浄性が包丁を通して菜食料理にも移されてしまうと考えられ、浄性の高い菜食料理（ニラミス）を用意するために、その調理器具さえも浄性の維持が求められるのである。あるいは、結婚式などの儀礼的機会には、このことは顕著になる。寡婦は晴れがましい結婚式の表舞台に出る事はない。もちろん会場に参加することは出来るが、既婚女性の活躍する婚姻儀礼とは別に、寡婦のためだけに用意された菜食料理（ニラミス）の食事の席で、ひっそりと食事をとる。豪華な料理のでる親族たちの宴で、席をともにすることはできないのである。そのために、19世紀のベンガルの社会運動家であるイッシュョル・チョンドロ・ビッダシャゴル(Isvarchandra Vidyasagar, 1820-1891)は、当時の保守的なヒンドゥー社会に対して、このような寡婦の再婚を強く勧め、その啓蒙活動を通して当時の女性たちの地位向上に尽力した。

ともかく、このように普段から禁欲的な宗教生活を送っている寡婦に対しては、特に数多くのプロト儀礼が求められている。しかし、ここでは普及本などでも盛んに紹介される少女のプロト儀礼や、既婚女性の行う多様で華やかなプロト儀礼とは大きく異なり、基本的には様々な種類の断食（ウポバシユ）の実践を中心とした禁忌の体系と言う色彩が強くなる。このような寡婦のプロトとして、最もポピュラーなものは、月に2度の白分と黒分の 11 日

に行うエカドシ・プロト・ウポバシュがある。これは、ほぼ毎月2度訪れる月の11日目に、ほぼ24時間に渡り、完全な断食を行う。この断食では、理想的な形では一切の水を飲むことも忌避され、自らの唾を飲みくらすことも避けることが理想とされる。さらに、この11日目の断食に加えて、多くの寡婦は、新月の断食（アマバツシャ・ウポバシュ）と満月の断食（プルニマ・ウポバシュ）を守ることが多い。これをすべて遵守すると、丸一日の間、水も飲めない完全な断食を守る日が、毎月4日以上に渡ることになる。そのため高齢の女性にとって、とりわけ酷暑のボイシャク月などには、非常に過酷な義務となるのである。

調査地の村人の多くは、これだけ厳しい禁忌が求められている理由を、ヒンドゥー教聖典の教えに従うものだと説明する。すなわち、夫の死後において、夫のために貞節を尽くすことで、その果報を願うというヒンドゥー教の古来の教えに従うのだと説明する。しかし、調査地での寡婦によるプロト儀礼の実践には、村落社会におけるその社会関係を反映した意味を指摘することが出来る。たとえば、寡婦によるプロト儀礼の実践は、特にバラモン・カーストやクシャトリアなどの調査地の上位カーストになるほど熱心である。また、個々の世帯では、自分がどれだけ厳しい禁欲をこれまで実践してきたかということが、むしろ誇りとして語られることが多い。すなわち寡婦にとっては、亡き夫の遺徳というよりも、むしろ村落では誉れの高い寡婦の務めを実践していること。そしてその事実が、寡婦の属する世帯や集落の成員によっても誇り高いものとして認識され、それが一族やカーストの名誉とも結びつけられて理解されていることが指摘できる。つまり、寡婦がこのような厳しい禁忌を守るとは、寡婦自身の名誉であり、さらにそれは寡婦が属するリネージュやカーストのステータスにも結びつけられて理解されるのである。

このような意味では、寡婦のプロト儀礼の実践を、単にヒンドゥー聖典の教えに従うものとして、宗教的観念にのみ基づいて説明することは出来ないだろう。村落社会における名誉や義務の観念など、寡婦によるプロト儀礼の実践をめぐる社会的な意味付けが変化しないことが、19世紀以来の寡婦の地位向上運動にも関わらず、このような厳しい禁忌がいまだに廃れずに行なわれている理由を説明すると言えらるだろう。

7 プロト儀礼の体系

(1) プロト儀礼の内容別分類

表一2で検討された、普及本の記述と調査地で見られる儀礼実践との対比的な分析から、調査地のプロト儀礼の実践体系について、次の3点が指摘できる。第一は、一般の普及本が網羅的な儀礼のリストを提示しているにも関わらず、現実実践される儀礼項目は、それらの中から選択的に行われていることである。例えば、オッコイ・トゥリティヨの日に行われるプロト儀礼群などは、その祭式で奉納される主要な供物の内容が、壺、シンドゥール(紅)、果物などのヴァリエーションを持ちながら、基本的には同一の儀礼次第を構成している。これは、実際にはこのプロト儀礼でこれらの内容が網羅的に実践されるのではなく、むしろプロトを行う女性の便宜を考慮して、このような選択肢を普及本ではリストに加えていると考えられる。第二は、村落社会などで行われているプロト儀礼の実践体系は、必ずしも儀礼書に描かれた網羅的なリストに対応するものではないことである。一般にプロト儀礼は、それぞれの季節を代表し、また多様な世代の担い手に応じた選択的な行為規範を構成している。このことは、プロト儀礼の社会的な実践の意味を理解する上で重要な示唆を与えている。特に、暦の始めのボイシャク月と収穫期のオッガン月に儀礼が集中して行われる傾向があり、儀礼リストで通年的な実践が規定されていても、実際にはこの時期にのみ行われる場合も多い。第三は、それにも関わらずプロト儀礼の様々な項目は、その担い手のジェンダーや世代に応じて、一定のカテゴリーが識別されており、それに従って儀礼群と言ふべきものが形成されていることである。

以上のような普及本と調査地の儀礼体系との対比的な検証を通して、個別のプロト儀礼の内容別分類を試みたものが、表一4である。これは、モジュール版の普及本に現れたプロト儀礼の担い手と祈願の対象などの内容分類を、調査地で実践される儀礼に対応させて類別カテゴリーとしたものである。ここで提示された儀礼のカテゴリーは、①ラクシュミー女神に関わるプロト儀礼、②シヨスティ女神に関わるプロト儀礼、③チョンディ女神に関わるプロト儀礼、④少女のプロト儀礼、⑤女神祭祀以外の既婚女性に関わるプロト儀礼、⑥寡婦のプロト儀礼、⑦その他の儀礼である。

表-4 プロト儀礼の内容別の分類

プロト儀礼の分類	
①ラクシュミー女神のプロト儀礼	バドロ月のラクシュミー女神の儀礼
	コジャゴリ・ラクシュミー女神の儀礼
	カルティック月の女神の儀礼
	野のプロトの儀礼
	ポウシュ月のラクシュミー女神の儀礼
	チョイットロ月のプロト儀礼
②ショスティ女神のプロト儀礼	オロンノ・ショスティ (森のショスティ)
	ロトン・ショスティ
	チャブラ・ショスティ (土塊のショスティ)
	ドウルガ・ショスティ
	ムラ・ショスティ (大根のショスティ)
	パタイ・ショスティ
	シトル・ショスティ
	オショク・ショスティ
	ニール・ショスティ
③チョンディィ女神のプロト儀礼	12月のモンゴル・チョンディィ
	ホリシュ・モンゴル・チョンディィ
	ジョエ・モンゴル・チョンディィ
	クルイ・モンゴル・チョンディィ
	シヨンコト・モンゴルバル
	シヨンコト・モンゴル・チョンディィ
	モンゴル・シヨン克蘭ティ
	シュオ・ドウオのプロト儀礼
	ナタイ・チョンディ
④少女のプロト儀礼	シヴァ神のプロト
	聖なる池のプロト儀礼

	10の人形のプロト儀礼
	ビシュヌ神の御足のプロト儀礼
	オショツト樹の葉のプロト儀礼
	牛飼いのプロト儀礼
	世界のプロト儀礼
	閻魔天の池のプロト儀礼
	セジュティ・プロト儀礼
	トウシュ・トウショリのプロト儀礼
⑤既婚女性のプロト儀礼	毎月の終わりの既婚女性の儀礼
	果物を用いた儀礼
	隠された宝の儀礼
	毎月の終わりの蜜の儀礼
	日々のシンドウールの儀礼
	ションダモニのプロト儀礼
	爪を切るプロト儀礼
	バナナや豆の儀礼
	果物やバナナの儀礼
	ショウガやターメリックの儀礼
	ループやターメリックの儀礼
	不壊の壺の儀礼
	不壊の少女の儀礼
	不壊のシンドウールの儀礼
	不壊の果物の儀礼
	玉座に遊ぶ儀礼
	吉祥なる4の儀礼
⑥寡婦のプロト儀礼	エカドシ・プロト・ウポバシュ（黒分/白分の11日）
	ブルニマ・ウポバシュ
	アマバッシュヤ・ウポバシュ

	オンブバチ・プロト
	ラム・ノボミ・プロト
⑦その他の儀礼	ラル・ドゥルガの儀礼
	モウニの新月の儀礼
	ジタ・ショスティの儀礼
	毎月の新月の儀礼
	モノシャ女神のプロト儀礼
	イトゥのプロト儀礼
	シヴァラトリ・プロト儀礼
	ビポッタリニ・プロト儀礼

(2) プロト儀礼の分類体系

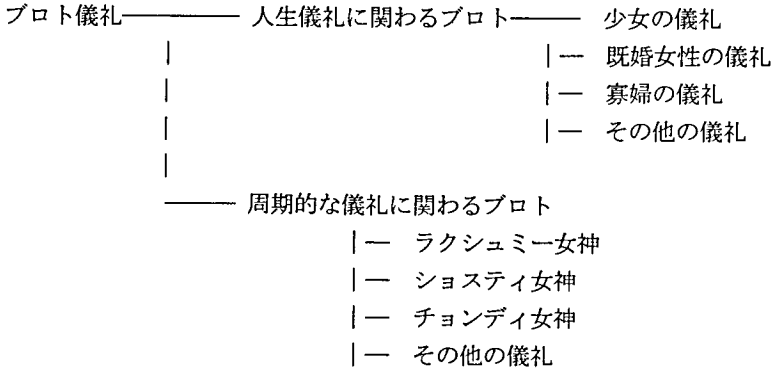
表-4の分類から明らかなように、一群のプロト儀礼は、大きく2つの系統に類別される。すなわち、特定の女神祭祀の系統に属するものと特定の儀礼の担い手によって実践されるものである。より詳しく見ると、前者の女神については、以下の3つの神格が挙げられる。すなわち、収穫や家の繁栄、富を司どるとされるラクシュミー女神に関わるプロト儀礼。出産や子供の生育・安寧に関わるとされるショスティ女神のプロト儀礼。苦難や危機などの災厄を防ぎ、家庭の安寧をもたらすチョンディ女神のプロト儀礼である。これらはいずれも、多くの場合、担い手による世代の区別を持ち込まない。しかし、実際にはそれぞれの世帯を代表する主婦頭（ギンニ）が儀礼を主導して行うという点で、世帯を基本単位としてその成員全体の安寧に関わる儀礼となっている。そのため、結果として実質的な儀礼の主導者は既婚女性となることが多い。また、特にショスティ女神は、出産や子供の生育に関わるという点で排他的に女性によって実践されており、そこに女性司祭によって主宰される儀礼とそれに関わる既婚女性たちという形で、女性によって構成される社会関係が顕著に認められる。いずれにしても、これらのプロト儀礼は女神祭祀に関わる調査地の年中行事や、毎月・毎週の決められた日時・曜日に行われる女神祭祀の体系に組み込まれることで、周期的な儀礼として繰り

返し再現され、継続性を持つことが特徴として指摘できる。

一方、後者の特定の担い手によって実践されるプロト儀礼を、さらにその担い手によって細分化して見ると、少女、既婚女性、寡婦、その他の女性一般という女性のライフサイクルによって区切られた儀礼カテゴリーが明らかとなる。ジェンダーの社会的構成という観点で見ると、これはジェンダーの役割を受容するステージと実践するステージ、そして夫の死後における果報の実践という寡婦のステージとして把握することができる。このようなプロト儀礼が、女性のジェンダーの役割に密接に結びつく形で構成されることで、通常の年中行事としての祭礼や個人的な祈願に基づいて行う奉納儀礼とは異なる、一群の儀礼体系を構成していることが理解される。また、これらの儀礼は、一度始めたら、ポイシャク月は毎日行うことや春と秋に対になって行われるもの、また初年度から継続して4年間に渡り継続することが求められることなど、一定の成立の要件を持つものが多い。また、ひとたび儀礼が完結すると、儀礼の担い手は次の行為規範のステージに移行することとなり、儀礼に課せられた課題が再現されることはない。このような意味では、これらの担い手によって区分される儀礼は、人生儀礼に関わる儀礼として整理することが出来るだろう。女性のライフサイクルとの関わりにおいては、特に少女から既婚女性への移行過程において求められる様々な少女のプロトの儀礼体系が、この特徴を顕著に表している。同様に、エカドシ・プロトやオンブバチ・プロトなどは、特に寡婦に関わるプロト儀礼と見なされているのである。

ただし、主婦頭を中心とした女性一般が担い手となる、女神祭祀に関連付けられたプロト儀礼や、男子なども含めて行うことが可能な、広い意味でのプロト儀礼なども存在する。また、ニット・シンドゥール・プロトやエヨ・シオンクランティなどの、既婚女性の行うプロト儀礼が、周期的に実践されている例も多いため、実際には両カテゴリーに重複して実践されるものも多く見られる。すなわち、周期的な儀礼と人生儀礼という類別や、少女の儀礼と既婚女性の儀礼という類別カテゴリーは、あくまでも分析的な体系として、構成されるものである。以上のようなプロト儀礼の類別体系を図式化すると、図一4のようになる。

図-4 調査地のプロト儀礼の分類体系



まとめ

シュリーニヴァース[Srinivas 1952]の定式化によって、南アジアのヒンドゥー社会におけるカースト的文化の多様性は、「サンスクリット化」という概念によって広く理解され説明されてきた。しかし、サンスクリット語で書かれた経典によって代表される「サンスクリット文化」と、多様な地域社会に残存する土着的な文化を意味する「非サンスクリット文化」の2項対立に基づくこの文化変化の説明モデルは、その内部に入って仔細な観察を行うと、実際にはあいまいな前提の上に成り立っていることが理解される。例えば、本稿で取り上げたラクシュミー女神のプロト儀礼は、本来バラモンの家庭でのみ行っていたものが、徐々に他のカーストの女性たちによって模倣されるに至ったのか、あるいは自然崇拜として営まれていた周辺カーストの文化がやがてバラモン司祭によって体系化されて取りこまれるに至ったのか、簡単に答えを出すのは難しいのである。実際には、ラクシュミー女神祭祀の多様な構成を見ると、稲の実りに対する信仰は、広く東南アジア世界にも共有される稲作文化という広がりの中でなければ理解できない要素を含んでいる。同時に、インド亜大陸の歴史においては、犁耕などの稲作技術や稲の加工技術の中に、先住民族の文化であるオーストロ・アジア文化から受け継いでも

のも多く含まれている [長田 1995]¹⁹。ここでは、儀礼自体よりも、その中のどの部分が、またどの時代のいつの時点から、それぞれの系統を引き継いだのかということが証明されない限り、単純に「非アーリア文化の残存」と断定することは出来ないのである。すなわち、今日の観察される状況からかつての姿を再構成するという、不確かな推測を導く危険が潜んでいると言えるだろう。

本稿では、このような既存のプロト儀礼に見られる文化史的解釈や合目的解釈に基づく儀礼論の限界を克服するために、ジェンダーやライフサイクルなどの社会関係に位置付けられた実践体系と、その担い手が認識する儀礼体系の社会的構成を検討した。序論でも述べたように、ベンガルのプロト儀礼に関する研究は数多く、その儀礼に付随する儀礼装飾は、今日ではベンガルの民俗文化を代表するモチーフとしても広く知られている。しかし、近年のプロト儀礼への関心の高まりにも関わらず、その前提として、儀礼に従事する人々にとっての実践体系の意味が問われることは、非常に限られていたのである。

本稿で提示された資料は、ボルドマン県のあるひとつの調査村で収集された資料に基づいており、その意味では地域的にも時代的にも限定されたものである。しかし、この調査地の事例に限定して見ても、一年間のサイクルを通して村の女性たちが、今日でもこれだけ熱心に儀礼に従事している事実や、その世代や人生サイクルごとに異なる実践体系が複合的に構成されている事実などは、この儀礼に従事する人々の内面的な視点を検討することが、今後のプロト儀礼論には不可欠であることを示している。このような調査地における儀礼体系の検討とそれを当該社会の社会構造の一部として理解する視点が、既存のプロト儀礼研究には決定的に不足していたということが、本稿が明らかにしようとした課題のひとつでもあった。今後のより広範な南アジアの儀礼とジェンダーの社会構成を検討する作業の中で、本稿の資料を改めて位置づけてゆく作業が、今後の残された課題となるだろう。

註

- 1 本稿では、ベンガル地方のプロト儀礼の呼称であり、本稿の主題となる資料の総称を、「プロト」の表記で統一した。このはベンガル地方での慣用表現にならったものではあるが、実際には北インドでは「ヴラト」。サンスクリット語では「ヴラタ」と呼ばれることが一般的である。北インドの議論も多数引用したが、混乱を避けるために、すべて記述は「プロト」に統一した。
- 2 近年では、ベンガルの儀礼装飾である「アルボナ」を含む民俗画の象徴性に注目した、沖・小西[2001]などが刊行され、一般の旅行者向けの雑誌である『季刊・旅行人：インド民俗画の世界・宇宙と神話を描く人々』（2004年秋号、No.145、蔵前仁一編）などでも特集に取り上げられるようになった。またプロト儀礼については、ベンガル地方を中心に、これまで数多くの研究が蓄積されている。この点については、注8も参照されたい。
- 3 外川[1999a; 2001a; 2001b]など。また、総論としては外川[2003]を参照されたい。
- 4 この点は、小西[1986]が取り上げている。
- 5 この7人の兄弟を持つ妹は、7人の兄弟から7回に渡り持参金（ダウリ）を貰い、自分はより良い条件で良家に嫁ぐことが出来るのである。
- 6 ショスティ女神のプロト儀礼については、より詳しくは拙稿[外川 2001b]を参照されたい。
- 7 例えば、S.R.ダス[Das 1953]やS.K.ラエ[Ray 1961]は、少女のプロト儀礼を、ベンガルの古代的で呪術的な文化要素、ないしは「基層文化」の名残をとどめるものとして注目した。
- 8 たとえば、Shila Basak [1998]; Sunil Kumar Das [1995]; P.K. Maity [1988; 1989; 1995]; Nabendu Sen [1995]; Sengupta [1972]; 小西 [1974; 1986]など。この点については改めて3節でも検討するが、本稿では、そのような観点が必ずしも誤りであると考えられるのではなく、儀礼が備える様々な意味論的レベルの複合における、ひとつの隠喩的象徴の次元と捉えることが可能である。また、後述のシラ・ボシヤクの論考は、南アジア全域に視野を広げた体系的な試みとして興味深い[Basak 1998]。このような民族誌的研究としては、セングプタ[Sengupta 1970; 1972] やドイツ語で書かれたグプタ[Gupta 1983]などを挙げる事が出来る。またサンスクリット古典学の世界においては、その浩瀚な古典籍に依拠した研究としてカネー[Kane 1974]が特筆される。
- 9 ベンガル暦における月の名称と季節の対応については、表一3にまとめている。

- 10 デュボアについては、その一部が邦訳されている。デュボア、J.A. 『カーストの民—ヒンドゥーの習俗と儀礼』1988 H.K.ビーチャム編、重松伸司訳注、平凡社
- 11 P.K.Maity, *Folk-Rituals of Eastern India*. p.5. 1988.
- 12 Nabendu Sen, *Meyeli Brata: Kodal-Kata Dhan. Meyeli Brata Bisaye*. Ed. Satnat Kumar Mitra.
- 13 この時期のベンガル知識人の動向については、特に臼田[1981]を参照した。
- 14 Nabendu Sen, p.66.
- 15 例えば、プロト儀礼の原初形態に注目することで、オボニドロナトは次のように述べている。「サンスクリット語の教典がまだ作られず、「ヒンドゥー教」というようないかなる宗教もまだ存在していない時代、つまり私たちの先祖のさらに遠い先祖の時代に、人々の間に存在した様々な宗教儀礼こそが、プロトと呼ばれていたのです。」[Thakur 1943:39]
- 16 Binay Ghosh, *Banglar Loksanskritir Samajtattba*. pp.44-7. 1976. In *Meyeli Brata Bisaye*. Ed. Sanat Kumar Mitra. pp.3-4. 1995.
- 17 女神の聖地としての調査地の特質については、より詳しくは拙書[外川2003]を参照されたい。
- 18 「プロトの物語」の翻訳の試みについては、拙稿を参照されたい[外川1998:1999b]。
- 19 この点について長田[1995:14-9]は、歴史言語学的考察から、原ムンダ語に起源する「犁」の語彙がインド・アーリヤ語に取り入れられた経緯と、それが今日のムンダ語に改めて借用されたという経緯を認める、再借用説を論じている。このような観点に立つと、しばしば多用される「アーリヤ文化」という記述概念が、それぞれの文脈においてその妥当性の再検証が求められることになるのである。

参照文献

Basak, Shila.

1995 *Meyeli Brate Lokacar*(in Bengali). in Sanat Kumar Mitra,(ed.), *Meyeli Brata Bisaye*. Calcutta: Pustak Bipani.

1998 *Banglar Brataparban*(in Bengali). Calcutta: Pustak Bipani.

Bennett, L

1983 *Dangerous Wives and Sacred Sisters: Social and Symbolic Roles of High-Caste Women in Nepal*.

New York: Columbia University Press.

Bhattacharyya, Asutosh

1948 The Cult of Sasthi in Bengal. *Man in India*. pp.153-165.

1998 *Bangla Mangalkabyer Itihas: A History of Medieval Bengal Narrative Poetry* (in Bengali). Calcutta: A. Mukharji.

Bhattacharyya, N.N.

1968 *Indian Puberty Rites*. Calcutta: Indian studies
: Past & Present.

Chatterjee, T.M.

1948 *Alpona: Ritual Decoration in Bengal*.
Calcutta: Orient Longmans.

Das, Sudhir Ranjan

1951 Vratya and Vrata. *Man in India*. Vol.31, No.3-4. pp. 172-84.

1952 *Folk Religion of Bengal*, Part 1-I, Calcutta: S.C. Kar.

1958 Folk Religious Rites: A Study in Origins. *Journal of the
Department of Letters*. University of Calcutta. Vol.II-2.
pp.79-196.

Das, Sunil Kumar

1995 Meyeli Brata-Anushthan(in Bengali), in Sanat Kumar Mitra,
(ed.), *Meyeli Brata Bisaye*. Calcutta: Pustak Bipani.

Dube, Leela

1988 On the Construction of Gender: Hindu Girls in Patrilineal India.
in Karuna,C (ed.), *Socialisation, Education and Women:
Explorations in Gender Identity*. Delhi: Orient Longman.

デュボア、J.A.

1988 『カーストの民—ヒンドウ—の習俗と儀礼』
H.K.ビーチャム編、重松伸司訳注、平凡社

Freeman, James

1980 The Ladies of Lord Krishna: Rituals of Middle-Aged Women in
Eastern India. in N. Falk and R. Gross,(ed.), *Unspoken World:*

Women's Religious Lives in North-Western Cultures, San Francisco: Harper & Row. 110-26.

Fruzzetti, Lina

1989 *Women in Hindu Society*. in Sandra Morgan, (ed.), *Gender and Anthropology*. Washington: AAA. pp. 268-93.

Ghosh, Binay

1976 *Pashcimbanger Sanskriti*. Vols. 1-5, (in Bengali).
Calcutta: Prakas Bhaban.

Gupta, Eva Maria

1983 *Brata und Alpana in Bengalen*. Wiesbaden
: Franz Steiner Verlag.

Inden, Ronald

1976 *Marriage and rank in Bengali culture: a history of caste and clan in middle-period Bengal*. Berkeley: University of California Press.

Inden, Ronald & Nicholas, Ralph W.

1976 *Kinship in Bengali Culture*.
Chicago: University of Chicago Press.

Kane, Pandurang Vaman.

1974 *History of Dharmasastra*, Vol. V, Part 1, (Second Edition).
Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Kaushik, Susheela

1993 *Women and Panchayat Raj*.
New Delhi: Har-Anand Publication.

Khare, R.S.

1975 *Hindu Hearth and Home*.
Durham: Carolina Academic Press.

Konishi, Masatoshi (小西正捷)

1974 「ベンガルのプラタ儀礼」 『季刊人類学』 5(1). pp.84-111.

(Vrata Ritual in Bengal. *Quarterly Magazine of Anthropology*.)

1986 「雨をよんだ少女」 『ベンガルの歴史風土記』 法政大学出版会

Mackay, E.J.H.

1948 *Early Indus Civilization*, 2nd ed. London.

Majumdar, Asutosh(ed.)

1992 *Meyeder Brata-katha* (in Bengali). Calcutta: Deb Sahitya Kutir.

Maity, Pradyot Kumar

1988 *Folk-Rituals of Eastern India*. New Delhi: Abhinav Publications.

1989 *Human Fertility Cults and Rituals of Bengal*.

New Delhi: Abhinav Publications.

1996 *Samaj o Sanskritir Ruparekha* (in Bengali).

Kalkata: Purbadri-Prakasani. (Bengali)

Marglin, Frederique

1985 *Wives of the God-King: The Rituals of the Devadasis of Puri*.

Delhi: Oxford University Press.

Mazumdar, Sucheta,

1981 Socialization of Hindu Middle Class Bengali Women.

U.C.L.A. South Asia Bulletin 1 (Winter): pp. 30-37.

McGee, Mary

1991 Desired Fruits: Motive and Intention in the Votive Rites of Hindu

Women. In Julia Leslie (ed.), *Roles and Rituals for Hindu Women*.

London: Pinter Publishers.

Mitra, Ashok

1961 *Pashcinbangerpuja-parban o mela*, Vol. 5, (in Bengali). Calcutta.

Mitra, Sanat Kumar(ed.)

1995 *Meyeli Brat Bisaye*, (in Bengali). Calcutta: Pustak Bipani.

Monier-Williams

1887 *Brahmanism and Hinduism, or Religious Thought and Life in*

India. London: John Murray.

Mukherjea, Charulal

1946 Bratas in Bengal. *Man in India*. Vol.26, No.3-4. pp.202-6.

沖守弘・小西正捷

- 2001 『インド・大地の民俗画』 未来社
長田俊樹
1995 『ムンダ人の農耕文化と食事文化：民族言語学的考察—インド文化・
稲作文化・照葉樹林文化—』 国際日本文化研究センター
- Pearson, Anne Mackenzie
1996 *"Because It Gives Me Peace of Mind": Ritual Fasts in the
Religious Lives of Hindu Women.*
New York: State University of New York Press.
- Raheja, G.G.
1988 *The Poison in the Gift: Ritual, Prestation, and the Dominant
Caste in a North Indian Village.*
Chicago and London: University of Chicago Press.
- Ray, Niharanjan
1949 *Bangalir Itihas: Adiparban*, (in Bengali).
Calcutta: Dey's Publishing.
- Ray, Sudhansu Kumar
1961 *The Ritual Art of the Bratas of Bengal.* Calcutta: Firma K.L.M.
- Sarkar, R.M.
1994 *Meyeli Brat-Anushthaner Sarbajaninta*, (in Bengali).
in Sanat Kumar Mitra (ed.), *Meyeli Brata Bisaye.*
Calcutta: Pustak Bipani.
- Sen, Dinesh Candra
1920 *The Folk-literature of Bengal.* Calcutta: University of Calcutta.
- Sen, Nabendu
1995 *Meyeli Brata : Kodal-Kata Dhan Meyeli Brata Bisaye.* Sanat
Kumar Mitra (ed.). Kalkata: Pustak Bipani. (Bengali)
- Sengupta, Sankar
1970 *A Study of Women of Bengal.* Calcutta: Indian Publications.
1972 *Banglar Mukh Ami Dekhiyachi*, (in Bengali). Calcutta.
- Sirkar, D.C.

- 1973 *The Sakta Pithas*. Delhi: Motilal Banarasidass.
- Srinivas, M.N.
1952 *Religion and Society among the Coorgs of South India*. Bombay: Media Promoters & Publishers. (Reprint in 1978.)
- Thakur, Abanindranath (Tagore)
1919[43] *Banglar Brata*, (in Bengali).
Santiniketan: Visva-Bharati University.
- Tod, James
1920[72] *Annals and Antiquities of Rajasthan or the Central and Western Rajput State of India*. vol.II.
New Delhi: Motilal Banarasidass.
- Togawa, Masahiko
1998 「シヨスティ女神の物語」 『湖河・バングラデシユの織物特集』
第9号 (出典) Asutosh Majumdar. *Meyeder Bratakatha*. 1992.
1999a 「ベンガルのプロト儀礼— アシヤル月のビポッタリニ・プロトの事例から —」 『民俗宗教の地平』 春秋社
(Brata Ritual in Bengal: with special reference to the ritual of *Bipattarnini-brata* in the month of Asar. in H. Miyake (ed.). *The Horizons of Folk Religion*.
1999b 「ラクシュミー女神のプロト物語」 『コッラニ・インドの女性特集』
第15号 (出典) Asutosh Majumdar. *Meyeder Bratakatha*. 1992.
2001a 「ベンガルのシヨスティ女神の儀礼」 『文明研究』
東海大学文学部文明学科
2001b Women within the Hierarchy: The *Jajmani-Purohitani* Relationship in the *Brata* Ritual of Bengal. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*. No.13.
2003 『ヒンドゥー女神と村落社会
—インド・ベンガル地方の宗教民俗誌—』 風響社
- 白田雅之
1981 「スワデシ運動と民俗芸能」 『アジア・アフリカ言語文化研究』

東京外国語大学 24:25-48.

Wadley, Susan

- 1976 Brothers, Husbands and Sometimes Sons: Kinsmen in North Indian Ritual. *Eastern Anthropologist*. Vol. 29. no. 1, pp.149-70.
- 1980 Hindu Women's Family and Household Rites. in N.Falk and R.Gross (eds.), *Unspoken Worlds Women's Religious Lives in Non-Western Cultures*.
- 1983 The Rains of Estrangement, *Contributions to Indian Sociology*, vol.17. no. 1.
- 1984 Vrats: Transformers of Destiny. in Charles Keyes and E.V. Daniel, (eds.), *Karma: An anthropological Inquiry*. Berkeley: Univ. of Calif.
- 1992 The Village Indra. in Patricia Lyons Johnson, (ed.), *Balancing Acts: Women and the Process of Social Change*. Boulder: Wetvies Press.

Wiser, Willam Henricks

- 1936[1958] *The Hindu Jajmani System: A Socio-Economic System*
Interrelating Members of a Hindu Village Community in
Services. Lucknow: Lucknow Publication House.

(fakir@hiroshima-u.ac.jp)